



「夕景—シルエット—」小田佐智(越知町)：「横倉山フォトコンテスト」入賞作品

夕映えに浮び上がる横倉山のシルエット

越知町横倉山、それは日々、四季折々ど実にさまざまな姿を我々に見せてくれる。山自体は、最高峰で1000m弱のさほど高い山ではないが、越知盆地(海拔約65m)からいきなり急勾配でそそり立つため充分迫力があり、冬場には山頂付近は吹雪き、雪を頂くこともよくある。急峻で起伏に富む山容は、それを構成する4億年前後の主として火山性の硬くて風化に強いさまざまな岩石に原因がある。山そのものが神秘的な形をしているだけでなく、有史以前からの歴史や謎を秘めた魅力あふれる山と言える。はるか800年の昔、土佐の国唯一の修験道の霊場であったのも、その山の神秘的な姿にあったのではないだろうか。山頂からは、はるか北方に同じ修験道の霊場で西日本最高峰の石鎚山の山頂(天狗岳)をわずかに望むことができる。越知町の市街地から望む突出した屋根型の山容は、まるで映画「未知との遭遇」に登場して

くるアメリカ・ワイオミング州国立公園のデビルズタワーにどことなく似ている。やはり、霊的な山なのであろうか。

このような横倉山の姿の中でも、一際魅力的なのは、夕日が西の空に沈みかける頃、段々と黒一色のゴツゴツした“塊”となって浮かび上がってくるシルエットである。それは、まるでSLのようないかにも男性的でたくましい姿で、いっそう神秘性を醸し出す。何度見ても見飽きない“勇姿”である。



冬の横倉山



晩春の横倉山

牧野富太郎と化石

安井敏夫

牧野富太郎博士は、高知県が生んだ世界的な植物分類学者であったが、博士は自分の専門の植物学以外のいろんな学問にも興味を持ち、かつ、スケッチなども数多く残している。このような博士の学問に対する姿勢は、博士が本格的に植物学の研究を始め出した19歳の頃、自らが編み出した「結網一撻」と呼ばれる勉学の心得・抱負の中でも「植学(植物学)ニ関係アル学科ハ哲学ブラ要ス」として記されている。すなわち、博士が学んだ学問は、物理学・化学・動物学・地理学・天文学・解剖学・農学・画学など多岐にわたり、また、博士の出身地が化石の産地として全国的に有名な高知

県の佐川町であったせいもあってか、一時期化石に関して熱心に取り組んだことがあり、詳細な化石のスケッチも描いている。博士が19~20歳の頃、よく地元の化石(Fossil)を採りに行ったことが記されており、また、当時わが国の地質学の指導的地位にあった小藤文次郎博士が佐川に地質調査に来た時は一緒に化石採集を行っている。余談ではあるが、牧野博士は、この時小藤博士が着ていたねずみ色のモーニングコートが痛く気に入り、それと同じものを洋服屋で作らせたという逸話がある。現存する写真からは、牧野博士の植物採集の時のいでたちはそのほとんどがスリーピースに蝶ネクタイ(“モーニング”)と帽子といった正装姿であるが、恐らくこれは小藤博士の影響であると思われる。小藤博士と牧野博士は縁があったのか、その後牧野博士が1896年(明治29)に台湾へ植物採集に行った際、偶然にも現地に地質調査に来ていた小藤博士と再会している。

ちなみに、小藤博士は、“山陰の小京都”として



東大助手時代(明治37年)の牧野博士
(東京の滝野川に植物採集に行った時に撮った記念写真)



「結網漫録」(抜き書き帳)の中に描かれている牧野博士の化石のスケッチ

[資料提供：高知県立牧野植物園]



ウニの棘の化石「松毬石」

知られる津和野の出身で、津和野といえば、文豪・森鷗外や哲学者・西周などの蒼々たる人材を輩出した町としても有名である。佐川が人口1万弱の小さな城下町でありながら、牧野博士や明治政府の宮内大臣を11年間も務めた田中光顕などの人物を育てた「文教の町」として地元高知県では知られており、互いにどことなく似た土地柄であるように思える。

さて、化石について牧野博士は、「牧野植物一家言」(昭和31年、北隆館)の中で、「佐川の化石」、「土佐高岡郡佐川町鳥ノ巣に於ける松カサ石」について述べている。前者では、越知町先達野のトリゴニア(三角貝)、佐川町(蔵法院)のダオネラ、貝石山^{※1}の貝の化石のことについて触れている。一方、後者では、ドイツ人地質学者・ナウマン博士が「Torinosu Kalk」として世界に紹介した鳥ノ巣石灰岩[中生代ジュラ紀後期:約1億5000万年前]中のウニの棘(キダリス: *Cidaris*^{※2})を松の毬果(通称:松ぼっくり)に似ていることから「松毬石」と称して紹介していて、かつ、それを東京大学理学部地質学教室に寄贈したと記されている。「我が思ひ出」(昭和33年、北隆館)の中の「佐川の化石」の項に、「以前、独逸人の、ナウマン博士と謂ふ地質学者も、来た事が在った」ことが記されている。ナウマン博士が佐川に地質調査に来た1883年(明治16)と1885年(明治18)には、記録の上では牧野博士も丁度高知にいたということになっているが、ナウマン博士に直接会って話をしたという記録は残念ながら残っていない。



キダリス(「原色化石図鑑」保育社より)

ちなみに、ナウマン博士を案内した同じ佐川の熱心な化石蒐集家・外山矯のような人物が再び出現することを牧野博士は期待していたようである。外山矯は、ナウマンの他にも、わが国初のノーベル賞(物理学)受賞者である湯川秀樹の実父・小川啄治や大石三郎(化石植物学)、江原慎伍などの地質学者の案内役も買って出ており、わが国の地質学の発展に陰で貢献した人物と言える。そのためか、江原博士は昭和2年(1927)に逝去した外山矯の追悼文「外山矯君を憶ふ」を書いており、その中で、氏の逝去は痛恨に堪えない所である、と述べている。なお、外山は、ナウマンが佐川に来る以前に卒論のため佐川周辺の地質調査に来ていた東大地質学教室の学生・奈佐(当時本多)忠行について化石採集の实地指導を受けている。

(やすいとしお/横倉山自然の森博物館副館長兼学芸員)

※1 弁石山ともいい、かつてここの山頂から南の佐川盆地方面を遠望して描いたナウマン博士のスケッチが残っている[E. NAUMAN und M. NEUMAYR (1890)]。

※2 これに類するもので、現生種の中に、ドングリに似た十数本の奇妙な棘を持つ「ドングリウニ」と呼ばれるものがある。

石亀の群生 — 里山の残る町・越知町 —

隣町・佐川町との境界に近い越知町柴尾の水田(休耕田)の中をぬって流れる小川(用水路)の岸に部分的に残った石積に、日本固有の亀・イシガメがたくさん棲みついている。その数ざっと数十匹。今時これほどの数の亀が狭い範囲にまとまって見られる所が高知県内に果たして他にあるだろうか。

亀と言えば、鶴と共に古くから日本人と関わりが深く、大変めでたいものの筆頭として崇められてきた生き物で、中国でも、長命と強壯と忍耐のシンボルとされ、長寿の象徴とされてきた。日本固有の「石亀」は、その幼体を「ゼニガメ」(銭亀)と呼び、成長して甲羅に藻などが付着したものは、「ミノガメ」(蓑亀)と呼ばれ、長寿を象徴するものとして古来より縁起のよいものとされてきた。大変めでたいものとして、掛軸や陶器などの画題としてよく描かれる「尉と姥」(老夫婦)の中にも



玄武

二羽の鶴とともに蓑亀の姿が見える。淡水の亀は、「神亀」として日本でも崇められたが、中国では古くから、神亀を方位に配置し、〈玄武〉と呼ばれた。玄武は北方の神とされ、東方の青龍、南方の朱雀、西方の白虎とともに四神をなす。京都の平安京も風水の思想に従い、山や川をこれら四神に見立てて造営された。奈良県明日香村で発見された「高松塚古墳」や「キトラ(亀虎)古墳」の石槨の北壁にも玄武の彩色壁画がはっきりと描かれている。玄武には、多くの場合、巨大な蛇がとりついている。

さて、一昔前は、人家も少なく、水田も多く、また、川も自然の土手や石積で囲まれていたので、亀などどこでもよく見かけたが、人口の増加に伴い水田が埋め立てられ宅地となり、車社会と共に道路が拡張され、それに伴って土の臭いのしないコンクリートとアスファルトの道路と化し、用水路はどんな小さなものでもコンクリートの三面張りとなり、とても生物の棲めるような環境ではな



陸に上ったイシガメ(成体)

くなってしまった。自然の景観よりも人間の生活、利便性や安全性が先ず第一であることは言うまでもないが、あまりにも自然に対して無配慮なやり方が行われてきた結果ではないだろうか。以前はどこにでもいたメダカでさえ今や「絶滅危惧種」となって大騒ぎしている時代である。

10年くらい前からやっと「近自然工法」と呼ばれるスイスとドイツでほぼ同時に考案された工法が、日本では最初に高知県のとある企業によって導入され、県内の河川改修工事等でも採用され始めた。本工法は、「自然の生態系を復元する」ことを基本にしており、人間だけでなく水辺を生活圏とする野生動物の生態系にも配慮した画期的な工法で、従来の工法に比べ見た目にも優しい。しかしながら、あくまでも近自然的であって自然そのものではない。春にはつくしや可憐な花が咲き、秋にはあちらこちらでいろんな虫の音の聞こえてくる、心に安らぎを与えてくれるそんな昔の自然の川や土手が懐しい。昔の自然豊かな時代に育った人間にとっては、とにかく昔が懐しい。昔を知っているから現在が寂しくてならない。自然から学ぶこと、得ることは計り知れないほど大きなものがある。人類の文明・生活は川によって生まれ、発展してきた。人間は、時には厳しい自然と戦いつつも、自然と共存してきた。もう一度昔へ戻り

たい、今の子供たちに自然豊かな環境の中でのびのびと育て欲しいと思うが、一度失われた自然はもう二度と再び元には戻らない……。人間も生物である以上、自然なしでは生きていけないことは言うまでもない。他の生物がいるからこそ人間も生きていられることを忘れてはならない。

ちなみに、この石亀の生息するすぐ近くの別の小川には、シジミガイも棲み、そこに3年前から地元越知町の環境ボランティア団体「川と山・ふるさと夢の会」（代表：山中伸一）のメンバーと地元の小学生たちがホタルの幼虫を放流し、最近では初夏の夜ホタルの飛び交う姿が見られるようになってきたと言う。また、この小川のさらに上流には、子供たちが親しめる「昔の自然の里づくり」をコンセプトにした“メダカ池”（同団体が休耕田を無償で借りて休日を利用して作ったもの）もあり、メダカを始め、いろんな種類のトンボや蝶などの昆虫も観察できる。また、池の下段には、牧野富太郎博士が縁で越知町と交流のある広島県芸北町から送られた燕子花あまつばなも植栽され、地元の人た



“メダカ池”の燕子花

ちの安らぎの場となっている。

越知町に残されたこれら里山の自然を、貴重な財産として、また、生きた教材として保護し、“自然体験ゾーン”として、学校の「総合学習」にも大いに役立てて欲しいものである。そのことによって、子供たちの情操の涵養にもつながり、また、生命の尊さや、自然や生物との共生の大切さを身に付けた広い心を持った子供たちが育っていくことを信じている。

（安井敏夫／横倉山自然の森博物館副館長兼学芸員）



イシガメの巣となっている小川の石積

博物館ニュース

第5回ネイチャーサロン：
「化石との出会い」

NPO法人「こうちフィールドミュージアム協会」主催の上記会合が、2月9日(日)に横倉山自然の森博物館を会場に開かれた。寒い時期にも拘わらず50余名もの参加者が集まった。

最初に、会員で高知化石研究会会長の三本健二氏から「高知の化石4億年」と題して、化石の豊富な高知県内の主な化石について、日本最古の4億年前のものから最近の1万年前のものまでを含めスライドを交えその意義と重要性について講演して頂いた。

講演後、実際に隣町・佐川町へバスで化石採集に出かける。「モノチス」と呼ばれる中生代三畳紀(約2億1500万年前)の代表的な示準化石として知られている二枚貝の化石が密集して産する場所での採集である。佐川町は、ドイツ人地質学者・ナウマン博士が明治時代に足を踏み入れて以来、全国



佐川町川内ヶ谷での化石採集風景



講演風景

に先駆けて多くの学者たちによって地質学的、古生物学的な研究が行われた場所として有名である。全国の地層の標準となるものも多く、モノチスの化石を含む「川内ヶ谷層群」もその一つである。

化石を採集した後、再び博物館に戻り、参加者が各自持ち寄った学術的資料や研究資料を展示し、一人一人それらについての研究発表を行い議論を交わした。“生きた化石”・ムカシトンボの標本とその化石、魚(硬骨魚類)の「耳石」(平衡感覚を司る器官で人間の三半器官に相当)のコレクション、土佐湾のタカラガイ・タケノコガイのコレクション、仁淀川流域の棚田・沈下橋の分布図などの出品があり、子供たちばかりでなく大人も楽しく学習ができた。高知県の自然の豊かさ、資料の豊富さを改めて感じさせられる発表会であった。

最後に、「化石とは何か」、「化石のできるプロセス」などの質問について議論し、次回の開催を約束し閉会とした。

友の会だより

「高知県レッドデータ動物展」の見学

平成14年度最後の友の会の行事として、高知県立のいち動物公園開催の上記企画展の見学会を3月23日(日)に行った。参加者：6名。

『県レッドデータブック(動物編)』(平成12年、高知県)に掲載されている、県内ですでに絶滅したり、絶滅の恐れのある野生動物の剥製や実物約80種が、生態や保護施策を解説した解説パネルとともに展示されていた。ニホンカワウソ、ツキノワグマ、クマタカなどの剥製の他、以前は

あちこちの小川や水田で見られたメダカ、タガメ、ゲンゴロウなどの生きた標本、オオムラサキ(日本の国蝶)、クロシジミなどの美しい蝶の標本も展示されており、係員からそれぞれの動物の生態や生息状況等についての説明を受けた。

横倉山自然の森博物館では、昨秋に「開館5周年特別企画展」と「よさこい高知国体」の「スポーツ芸術」とを併せ、「土佐の生き物たち 一滅びゆく野生動物」を開催したが、今回の企画展は、対象をさらに広め、昆虫や生きた魚類をも含めたものであった。その中には、当博物館所蔵のヤイロチョ

ウ(越知町産)とツキノワグマも展示されていた。

企画展見学後、桜の花が2、3分咲きのうらかな春の陽気の漂う園内の動物を各自観察し、2時過ぎ動物園を後にした。残念ながら今回は参加者は少なかったが、蝶にも人間と同じように血液型〔AB,A,B,O型〕があって、それによって翅の色の現われ方が異なってくるなど、新たな発見や感動を得ることができた。



篠山のアケボノツツジの観察

平成15年4月29日(火・祝日)、本年度最初の友の会の行事として、高知県と愛媛県の県境にある足摺宇和海国立公園内の篠山(1,064m)のアケボノツツジの観察会を行った。毎年横倉山のアケボノツツジの観察会を行っているので、今年は比較の意味で対象を変えてみた。参加者:27名(内会員:21名)。案内は高知市子ども科学図書館指導員で本会員の恒石直和先生。

アケボノツツジは、四国と九州(ツクシアケボノツツジとして区別)に分布する、ピンク色の5枚

の花弁をもつほのぼのとした色合いの大変上品なツツジであるが、篠山で見られるものは、全国屈指の大群落地としてその名が知られている。通常岩場に自生することが多いが、ここでは山頂付近の岩場以外のなだらかな山の稜線付近にも推定樹齢100年以上のアケボノツツジの大木が何本も生え、見事な花を咲かせているのが特徴である。移動時間が片道5時間弱と長く、ゆっくり観賞する時間がとれなかったが、それでも参加者はそのみごとに群生と魅力的な美しさに感動した様子だった。



《博物館友の会「フォレストクラブ」の平成15年度の活動予定》

- 4月29日(火・祝日) / 篠山(宿毛市)のアケボノツツジ群生の観察
- 5月18日(日) / 鳥形山(仁淀村)の植物観察
- 5月24日(土) / 友の会総会
- 8月(未定) / 夏休み木工教室
- 9月7日(日) / 横倉山のコオロギランの観察
- 9月28日(日) / サシバの渡り観察会
- 10月4日(土)、5(日) / 福井県立恐竜博物館の見学
- 12月14日(日) / クリスマスリース教室

横倉山ミニ歳時記

■ホタルブクロ(ききょう科)
Campanula punctata Lam.

日本各地の山野と朝鮮半島、中国、シベリア東部の東アジアの温帯に分布する。花(花冠)は大きな鐘状で、花期は平地では5月中旬～6月一杯くらいであるが、高地では7月にまで及ぶ。四国ではちょうど蜚(ホタル)が飛び交う頃から咲き始め、和名の「蜚袋」は、一説では子供が花の中に蜚を入れて遊んだことから名付けられたとも言われ、提灯を思わせる白い袋の中で点滅するほのかな光は、幻想的でロマンチックであり、清少納言など平安貴族の女性たちもきっとこの種の遊びに興じたのではないだろうかと思像しつつ試してみてもどうだろうか。花の色は、日本では紅紫色のものが一



般的であるが、高知県では東部や高地などのごく一部を除いてほとんどが白色のものであり、横倉山でも林道沿いで白いホタルブクロの小群生をよく見かける。

博物館日誌(抄) ('03.3~'03.11)

- 3月29日(土) 博物館協議会
- 4月29日(火)～6月1日(日) 横倉山と天狗高原の植物展
- 8月 3日(日) 夏休み博物館教室[昆虫]
- 7月27日(日)～8月31日(日) 企画展:「鉱物の世界ー自然の造形美ー」
- 8月10日(日) 夏休み博物館教室[植物]
- 8月23日(土)～8月29日(金) 学芸員実習受入れ
- 8月24日(日) 夏休み博物館教室[化石]
- 9月21日(日)～11月3日(月・祝日) 企画展:「世界の昆虫展 III」[予定]

スタッフの声、声、声

(斎藤) ほっとできる時間と空間をいつも与えてくれる横倉山。時々、登りたいという気持ちにさせてくれる山。そして、その時はいつも新しい出会いをつくってくれる山。この山をフィールドとして、自然環境、生態系などいろいろな場面を見ていきたいと、そして、「自然のままに」をキーワードとしてかかわっていきたくと思っています。
(安井) 昨年は1ヶ月ほど冬の到来が早かったせいか、その分今年は春の訪れが幾分早いようで、御雛様の時期に桃の花がちょうど見頃となり、その上うぐいすまでがさえずり始めた。季節の移り変わりに動植物は驚くほど敏感である。これからの世の中は自然が一番の財産であり、生きた教材である。いつまでも自然を大切にすることを、後世に伝えていきたいものである。それが当博物館の役割の一つでもある。
(小松) 博物館というと、何故か不思議な所という印象が僕にはあります。入ってしまうと出てこられなくなるような感じといますか。それは、森について僕の持っている印象と同じでして、しかも、自然の森となりますと、ジャン

グル? ゾクゾクしてきます。さあ皆さん、横倉山自然の森博物館へようこそ!
(黒原) 4月中旬に母と横倉山の織田公園へボタンザクラを観に行きました。白やピンク色の満開の花が一面に咲き誇り、普段見る桜とはまた違った美しさが感じられました。ただ、この日は曇りだったので、来年は天気の良い日に行きたいと思います。
(福岡) 5月に休館日を利用し、職員で「横倉山」へ登りました。館長、植物の専門家・大倉先生にいろいろなことを教えていただき、とても内容の濃い「横倉山」になりました。6月にも登る予定ですが、きっと5月とは別物の「横倉山」になると思います。もっとたくさんの方に横倉山を知って欲しいです。
(細川) 博物館の入口に生えているメタセコイアにきれいな黄緑の葉が出て、去年より背が高くなったようです。白や黄色の蝶も見かけるようになり、事務所の四角い窓から見える景色の変化に毎日楽しませてもらっています。

高知県越知町立
横倉山
自然の森博物館

THE YOKOSUWAYAMA
NATURAL FOREST
MUSEUM Ochi

〒781-1303 高知県高岡郡越知町越知丙737番地12
TEL0899(26)1060 FAX0899(26)0620

- 開館時間: 午前9時より午後5時まで
最終入館は午後4時30分
- 休館日: 毎週月曜日(祝日の場合は翌日)
12月29日から翌年の1月3日まで
- 入館料: 大人.....500円
高校・大学生.....400円
小・中学生.....200円 (※各20名以上の団体は100円引)
- 越知への交通
高知 217号線 越知IC 20分
佐川 バス 約15分 越知

